

# 社会人向けオンライン大学院の研究ゼミに関するニーズ調査 — 同期・非同期ハイブリッド型設計案に基づいて —

Needs Survey on a Research Seminar in an Online Graduate School for Working Adults  
— Based on a Hybrid Synchronous/Asynchronous Design Proposal —

宮下和子・平岡斉士

Kazuko MIYASHITA, Naoshi HIRAOKA

熊本大学教授システム学研究センター

Research Center for Instructional Systems, Kumamoto University

<あらまし> 社会人向けオンライン大学院における研究ゼミの設計案を提示してニーズ調査を実施し、ゼミ設計案の改善に向けての方向性を見出した。設計案には、社会人向けオンライン大学院の特徴である、社会人学生やオンラインでの研究指導という点から、任意参加、SMEとしての役割、修了生の参加、リフレクションとナレッジ化の4つのポイントを示した。ニーズ調査の結果、個別指導の時間を増やしてほしいというニーズがあり、ゼミ設計案の改善を必要とすることが今後の課題として見いだされた。

<キーワード> 社会人向けオンライン大学院, ゼミ設計, ニーズ調査

## 1. はじめに

社会人向けオンライン大学院における、研究指導の場としての研究ゼミには、一般的な通学型大学院とはいくつか異なる特徴がある。

第一に、学生が社会人という点である。すなわち、純粋に学術の探求に専念するのではなく、職業人としての実践課題を持ち、その課題に関連した専門知識・技能の獲得及び研究を目的に大学院で学んでいる。第二に、オンラインでの研究指導という点である。通学型の大学院におけるゼミ指導の多くは、配属された研究室に机が与えられ、日々研究室に集うことで、指導教員や同じゼミ生とのインタラクションが自然と発生する。いわばゼミとしての共同体への参加が自然と起こる構造になっている。しかし、物理的な研究室が存在しないオンラインでの研究指導では、日々の様子が見えにくい構造となっている。したがって、ゼミ活動は通学制と比べて、ゼミ生の主体性に大きく依拠することとなる。

本研究では、これらの特徴を持つ社会人向けオンライン大学院に適したオンライン研究ゼミを設計 (D) することを目的としている。本発表では、インストラクショナル・デザインにおけるADDIEモデルを活用し(鈴木, 2005)、ゼミ設計案 (preD) を作成した後に、ニーズ調査 (A) を実施し、より良いゼミ設計 (D) へと反映させるプロセスについて報告する。

## 2. 研究対象ゼミの概要

本研究では、研究対象として、社会人向けオンライン大学院である K 大学大学院 H ゼミを対象とする。H ゼミには修士及び博士課程併せて8名の学生が在籍しており、全員社会人である。

既にMoodleによる非同期型のゼミは運用されており、その主目的は、ゼミ生と指導教員との個別指導のやり取りをゼミ内で共有することで、指導を効率化することにある。

また、同期型での指導としては、オンライン会議システムを用いた個別指導が、学生からの要請に応じて随時実施されている。しかし同期型の定期ゼミは実施しておらず、非同期型ゼミを超えた、より深い議論を発展させる場として今回導入することとした。したがって、H ゼミは今後、非同期型ゼミを主とした同期型定期ゼミ (以下、同期ゼミ) とのハイブリッド運用となる。

## 3. ゼミ設計案のポイント4つ

はじめにで述べた2つの特徴をもとに、研究ゼミ設計案として4つのポイントを示した。

### ポイント1 ゼミへの任意参加

学生は社会人であり、自らの実践上の課題に対する自己主導的な動機のもとで学んでいるという前提において、研究に対する主体性を期待している。したがって、ゼミへの参加自体は同期・非

同期共に任意とする。また、同期ゼミでの発表もいわゆる持ち回り発表ではなく、研究指導を必要とする相談や議論が必要なテーマを挙手制で話題提供するというスタンスである。

### ポイント2 ゼミ参加者のSMEとしての役割

一般的な大学院では、ゼミ生は、指導教員から研究指導を受ける側に立つ。しかし、本研究で対象とするゼミ参加者は、多様な専門性を背景とした職業人であることから、純粋に学生であるだけでなく、何らかの専門分野のSMEでもあるため、ゼミ参加者は、自身もSMEとして他者へ協力することが期待されている。

### ポイント3 修了生の参加

一般的な大学院では、正規学生・研究生が研究指導の対象となり、修了生が正規学生と共にゼミに参加することは一般的ではない。しかし、本研究で対象とするHゼミでは、修了生は教員の共同研究者という位置付けで捉えており、指導教員と共に、IDer または SME として現役学生に対して助言等を行うことが期待されている。そうした助言等の関わりを通して、修了生自身のIDスキルが向上することも狙いとしてある。

### ポイント4 リフレクションとナレッジ化

同期ゼミでの議論を経て得た気付きや問題解決案を振り返り、Moodle上に記述していく。そうした記述の中からゼミ全体にとって有益な情報をナレッジとして整理し共有していく。このように、同期ゼミと非同期ゼミとを連動させることで、ゼミとしてのナレッジが蓄積されていくことを期待している。

## 4. ゼミ設計案に基づいたニーズ調査

ゼミ設計案を作成した後に、可能な限りゼミ参加者のニーズに即した改善を図るために、ニーズ調査(表1)を実施した。ニーズ調査にあたっては、作成したゼミ設計案を提示し、同期ゼミへの参加希望調査も兼ねた。

現状の研究活動及び実践活動における課題として表1の選択肢から、重要との認識が大きいものから3つ回答を求めた。

表1 研究活動及び実践活動における課題に関するニーズ調査の選択肢

a) (現役生対象) 個別の研究指導の時間がもっとほしい
b) 自分の研究について多様なフィードバックがほしい
c) 自分の現場の課題解決について議論したい
d) 研究の進捗が遅れている
e) 他のゼミメンバーの研究内容を理解したい
f) IDのスキルを磨く場がもっとほしい
g) その他

## 5. ニーズ調査の結果

回答があった6件のうち、現役学生(修士・博士)からの回答4件、修了生からの回答が2件であった。

現役学生の上位3つのニーズの中で、a)個別の研究指導の時間がもっとほしい、b)自分の研究について多様なフィードバックがほしい、が全回答に共通して含まれており、また、修了生のニーズとしてf)IDのスキルを磨く場がもっとほしい、e)他のゼミメンバーの研究内容を理解したい、が全回答に共通して含まれていた。

## 6. ゼミ設計案の改善に向けての考察

現役学生の回答「多様なフィードバック」に対しては、ゼミ設計案ポイント2と3で対応できると考えられるが、「個別指導」については別途検討する必要がある。すなわち、個別指導でのフィードバックと同等もしくはそれ以上の質・量が研究ゼミから得られれば、この要望には応えられると考えられる。この点は、ポイント3と4を運用しながらその効果が得られているかを検証しつつ、改善を図っていく必要がある。

また、修了生の回答に対しては、ポイント3で対応が可能であると考えられる。

## 参考文献

鈴木克明(2005)〔総説〕e-Learning 実践のためのインストラクショナル・デザイン. 日本教育工学会誌 29(3)(特集号:実践段階の e-Learning);197-205